

アジア舞台芸術祭

参加者インタビュー#04

近藤佑子さん／俳優

ハノイの演出家、グエン・ホアン・トゥアン氏のチームに参加した近藤さん。俳優として、昨年からシンガポールの劇作家とのコラボレーションに携わってきた経験もありますが、ほとんど英語の喋れないベトナム・チームとの共同作業に、当初は不安もあったと言います。

「私もベトナム語が全然わからなくて最初は直接的なコミュニケーションがなかなか取れませんでした。でもリハーサルするとき、グエンさんがベトナム語で話している指示が何となく分かった。通訳さんを通さずに、こんな感じだよね？」とやってみせたら、うんうんと頷いてもらえました。

俳優として新しいプロジェクトに関わる時は、はじめに演出家との共通言語を探ります。グエンさんが求めているものは初日から明確でした。稽古でも、まずはグエンさんが求めているものを私の身体を通してやって見せた上で、“こういう風にやってみたいんだけど、どう？”と提案して作っていく作業が面白かった」

去年から携わってきた、翻訳家・演出家・役者・作家と一緒にシンガポールの戯曲を日本語訳していくプロジェクトの経験も活きました。英語から日本語へ直訳されたセリフは、前後の文脈から離れ本来のニュアンスを損なってしまうこともしばしば。近藤さんはそうした言葉を、役者の身体を通してセリフに書き直していく立場でした。

グエン氏のチームは台本がなく、役者自身が自分たちで考えてセリフを発することを求められました。日本語は時代背景によって言葉選びが変わることを伝えると、「関係性がわかる言葉で喋って欲しい」というリクエスト。そこで夫婦であるとわかるよう、夫を「あなた」と呼びかけることを提案しました。

近藤さんにとって、これまでは言葉もわからず、行ったこともなかったベトナムという国。アジア舞台芸術祭での共同作業を通じて関心を持ったのはもちろん、とても身近な国になったと言います。

「初めてベトナムという国と関わって、自分の中で存在感がすごく大きくなりました。彼らがベトナムそのものではないかもしれないけれど、こういう人たちがベトナムにいるんだという実感や、彼らを通じて見えるお国柄から、印象が大きく変わった。

まるで旅行で訪れたような、ベトナムという国に確かに触れたという感覚がありました。ベトナムという国のおいを嗅いだ、というような」

また俳優として創作の現場だけでなく、アジア各国の演出家同士の議論にも関心を持って参加しました。

「ラウンドテーブルで取り上げられた『芸術性と大衆性』は自分にとっても関心のあるテーマ。タンロンは演奏者も入れて100人くらい所属していて、グエンさんは彼らを食べさせるということを常に考えている。日本では役者だけでは食べていけないことが多く、そのことをグエンさんと話し合うこともありました」

近藤さんにとって「すごくいいタイミングで参加できた」という今回の芸術祭。国籍も文化的背景も違う初対面の人たちと一緒に作品づくりをするときに、自分が俳優として何を提示すればいいのか考えることは、彼女自身のキャリアにとっても大きなヒントとなりました。

「作品や演出家が好きというモチベーションだけではなく、プロの俳優として何ができるのか。どんな作品、どんな演出家とやるときでも、俳優が持っていなければいけないスタンス、方向性が何となく分かった。これからの自分にとって、大きなテーマになっていくと思います」